

---

# 空への道行き

土田かこつ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空への道行き

### 【Nコード】

N5610Z

### 【作者名】

土田かこつ

### 【あらすじ】

「一週間僕に付き合ってくれたら、痛みのない方法で君を殺してあげる」

古びたビルの屋上、少女の飛び降りを引き止めた謎の男は軽薄そうな顔でそう言った……。

偶然の邂逅が少女の過去に光をあてる。

売れない作家の計画。死にたがりの少女の打算。

二人の思惑の行方はいかに。

シリアスよりの青春もの。ラストは救いのあるものになる予定です。

## いつか見た空の色・1

その黒い小さな箱を開けた瞬間、彼が息をのむのがわかった。

きらびやかな電飾に彩られた並木道。

傍らに並ぶベンチで、隣に座る彼の顔を見上げた。

橙の柔らかな明かりが横顔を照らし出す。

手渡したばかりの小箱の中には、銀の十字架のネックレスがあるはずだ。

クリスマスにかこつけた、彼への初めてのプレゼント。

もちろんちゃんと男物で、デザインもそれほど派手じゃないものを選んだつもりだった。

だが。

ふたに右手をそえた彼は箱の中身を見つめたまま動かない。

怪訝と言うより不安になる。

もともとネックレス自体は自分の選択ではなく彼のリクエストだったのだが。

好みに合わなかったのだろうか。

「シルバーのクロス、欲しいって言ってたでしょう？」

見かねて声をかけると、彼は大きくため息をついて顔を上げた。

吐き出された呼気が白い。

「つけていい？」

こつちが頷くよりも先に、長めの鎖を頭からかぶるようにして首にかけた。

深緑のセーターに銀色がよく映える。

シンプルな形も線の細い彼にあっていた。

「なかなか様になってるじゃん」

ほっとして少し笑う。

彼はネックレスを確かめるように俯いた。

「ん、ありがと」

つと、彼の手が伸ばされた。

髪にごみでもついてたか、とぼんやりと見送った腕は視界の横を通りすぎ……、気づけば体を引き寄せられた。

「！」

呼吸が近い。息がつまって言葉が出ない。体が熱を上げていく。自分の心臓の音ばかりがうるさく、彼の鼓動が感じられない。

「……ちよつ、と」

みじろぎしようにも抱きすくめた腕はゆるがない。

油断した。

普段から態度や口ぶりこそ積極的だが、彼が直接に触れてくることはなかった。

せいぜい制服の上から捕まれるか髪の毛をかき回すくらいがいいところで、手をつないだこともない。歩くときは必ず人一人分間をあけていた。

もどかしくも心安い距離感を、これまでずっと保ってきたのに。

「ああい」

声が少しだけくもって耳に届く。

「なんか、ちよつと泣きそう」

「馬鹿」

甘えをふくんだ声が少しだけ情けなくて笑った。

ようやく体から力が抜けて、彼の肩にあごをのせる。

「うん。馬鹿だなあ」

ため息とともに吐き出された言葉が冷たく耳をくすぐって消えていった。

寒かった。

街中がむやみやたらにきらきらしていた。

でもそれが苦にならないくらいには自分も浮かれていた。  
そんな季節。  
今は、昔の。

## 憂鬱な月曜日・1

ぼんやりと白い、うす曇りの空を見上げて少女はため息をついた。

休み明けの月曜日、気だるい空気がただよう平日の昼下がり。

おそらく、はたからすれば気まぐれに授業をサボった女子高生が暇をもてあましてるように見えただろう。

彼女が腰掛けているのが、古びたビルの屋上の錆びた鉄柵でもなければ。

そこは駅前通りから離れた町のはずれにある、開発から取り残された古いビルだった。

もともと電子部品メーカーの自社ビルだった。会社は倒産したものの建物は放置され、そのまま用途のないオブジェのように町に居座り続けた。

もっとも、最近では肝試しの子どもたちやじゃれつく場所を探すカップルによって新たな需要を得ていたようでもある。

少女は柵の外に投げ出した両足を揺らしながら空を見ていた。

その顔に思いつめたような表情はない。ただ何かをふっきったような目で空をながめていた。

（私が飛び降りたら）

ここは危ない場所として再び封鎖されることになるのだろうか。子供たちから秘密の遊び場を奪ってしまうのはしのびないかな、なんて考えが頭をよぎって苦笑した。

しかたない。

どうしようもない。

どうでもいい。

乾いたあきらめが感情を支配していく。

視線を下に落とす。

見慣れたローファーのはるか先、コンクリートの地面。  
彼女の最後の目的地。

もう一度顔を上げ、白い空を焼き付けてまぶたを閉じる。

そのまま何もない中空に身を躍らせようとしかかどで鉄柵を蹴りつけ、

「！」

瞬間、身体に衝撃が走った。

予想していた浮遊感はない。

地面に打ち付けられた？ まさか。

こんなに意識が残るはずがない。痛みもない。

第一、感じた力が前へではなくうしろへの。

困惑する少女の頭上で誰かがため息をつく気配がした。

「落ちたら痛いぞ？」

頭のすぐ上から聞こえたのは、的確なようでひどく的確はずれな言葉だった。

飛び降りようとした瞬間に少女を後ろから抱きよせて引き止めた

男は、そのまま抱えあげて柵の内側におろしてしまった。

下から見えたからね、間に合ってよかったよ。

どこか真剣味にかける口調であっさりと言われて唇を噛む。

エレベーターは動かない。下から階段で上ってくるにはそれなりに時間がかかるはずだ。

そんなに長い時間、空に見とれていたのか。

あの古い非常階段を音もなく駆け上げられるはずもないのに足音さ



え気づかなかった。

そんなに自分の意識に気をとられていたのか。

「なんでとめたの」

理由なんて聞いても意味はない。通りすがりのお人よしに決まってる。

わかっていても言わずにはいらなかった。

「んー。可愛い女の子がいなくなるってのは世の中にとって結構な損失だろう？」

状況に似合わぬ軽口に、あらためて男を見る。

ダークグレーの長いコート。中のセーター靴も、目深にかぶったつばの広い帽子もすべて黒に近い灰色だ。肌も浅黒い。夕闇の中にいたら保護色になって見えなくなってしまうそうだ。

顔は若く見える。だがどこか時代がずれたような格好だった。

「おとなしいね、君」

黙ったままの少女に男が笑いかける。

「こういうの止められた人って、正直もつと抵抗するものだと思うてた」

目をそらしてそっけなく言う。

「別に。死ぬのなんていつでもできる」

止められたことは腹立たしいが、こうなった以上ことを荒立てずにすませるべきだろう。

警察や家に連絡がいくようなことになれば二度目がやりにくくなる。

幸い男はあまり生真面目なタイプではなさそうだ。

騒がなければきっとこの場を切り抜けられる。そう算段をつけた。だが。

「じゃあさ。一週間だけ僕に付き合ってくれないかな」

緊張感のない声が少女の期待を裏切った。死にぞこないにどんなナンパだ。

呆れた少女が突き放すより先に、男が低くささやいた。

「一週間付き合ってくれたら、痛みのない方法で君を殺してあげる」

軽い口調はそのままの物騒な物言い。

だが、少女にはこの上なく魅力的な条件で。

しかめた顔を覗き込む男の表情は軽薄そうなくせにどこか底知れない。

「自殺の手助けは犯罪でしょう」

口をついてでた言葉は自分でも言い訳めいていて。

新手の詐欺にでも引っかけたような気分で相手をにらんだ。

## 憂鬱な月曜日・2

立ち話もなんだから、と連れてこられたのは路地裏の小さな喫茶店だった。黒ずんだレンガ造りの店内は薄暗く、コーヒーと煙草の匂いが漂う。

男は慣れた様子で店に入り、少女に席をすすめた。

注文をとりに来た店員が去るのを見送って、しびれを切らしたように少女が口を開く。

「結局、あなたは何なの」

「んー、通りすがりの吸血鬼、かな」

こともなげに返ってきた言葉はあまりにも突飛で、少女は眉をひそめて男を見る。

「……は？」

「信じない？」

意味がわからない。「冗談にしても脈絡がなさすぎる。

少女の目は明らかに不審なものを見るようで。

露骨な反応に男は肩をすくめたてあつさりと言いかえた。

「月傘既望。しがない物書きさね」

「ツキカサ、キボウ？」

少女は怪訝な声を出した。どこかで聞き覚えのあるような名前だった。しかし、既望と名乗る男の顔は記憶にはない。

「小説家？」

もつとも物書き、つまり作家なら名前だけを知っていてもおかしくはないかもしれない。考え直して軽く首を振る。

「君の名前は？」

「佐野葵」

しかたなく名乗った少女、葵はしかめた顔で既望を見た。

まだ本来の用件を聞いていない。既望は頷く。

「それでさ。今書いてるのに死にたがりの女の子が出てくるんだけ

ど、どうも筆が進まなくて。話を聞かせてもらえないかな、と」  
間に合ってよかったよ。

笑って言ったあの言葉は、「助かってよかった」ではなく「取材  
相手が捕まってよかった」という意味だったのか。

助けられたのが不満だったはずなのに、それはそれで妙に癢に触  
って葵は眉間のしわを深くした。

「本当に殺してくれるの」

「ちゃんとつきあってくれたらね」

「どうやって」

いらだちもそのままに言いつのる。

結局、既望の口車にのる形でここまでできてしまったが、望みどお  
り最後まで面倒をみってくれるかどうかは正直かなりあやしい。

しかも痛みのない方法で、と既望は言った。

いったいどうするつもりなのだろう。何か薬でも使うつもりなの  
か。まさか本当に血を吸うわけでもないだろうに。

できるなら死んだ後であり事件になるようなことは避けたかつ  
た。

既望は少し驚いた顔をして、ふっと息を吐くように笑った。

「それは秘密」

からかう口調は相変わらず。

人を食った笑顔もそのまま。

だが、細めた目の奥にさっきまでとは違う色を見た気がした。

（この、顔）

見知らぬ男の顔のはず。

なのにその表情は葵がよく知るものに似て。

聞いただすことも忘れて葵は息をのんだ。

からかうような笑顔の、その目の奥に一瞬浮かんだ違う色。

何かを抑えるような。こらえるような。あきらめにも似た何か。

見慣れぬはず既望の顔に呼びおこされたのは、葵が記憶から追い

出すことのできなかつた少年の面影だった。

いつも調子のいい口ぶり与人懐っこい笑顔の少年が、不意打ちのようにのぞかせた表情。気づくか気づかないかのほんの一瞬浮かんで消える。

既望の顔立ちが彫が深く肌も浅黒い。

記憶の中の少年は線が細くて色も白い。

顔のつくりはまるで違う。

なのに、表情のつくりが同じなのだ。

見るものにかすかな痛みを抱かせる目の色。

葵が、その意味を知ろうとしてついになわなかった……、

「お待たせしました」

ふいに、第三者の声が葵の思考をさえぎった。

店員がコーヒーと紅茶とそれぞれの前においていく。

コーヒーカップを引き寄せた既望の顔をうかがえば、そこにはさつき見た色はかけらもない。

（見間違い、か？）

馬鹿みたいだ。何を今更。

仮に目の前の男が似た表情を見せたからといってそれが何だというのだ。

既望は手帳を開き、じゃあ改めて、と口を開いた。

「それで、動機はなんだったんだろう」

「さあね。空が綺麗だったから、とか」

既望は少し目を見張り、それからおかしそうに笑った。

「なかなか詩的でいいけど、ちょっと読み手が納得しないかな」

葵の投げやりな調子を気にするふうもない。

さつき見せた一瞬の目の色以外、既望の表情はほとんど変わらなかった。

からかうような笑み。せいぜい軽く驚いてみせるくらいだ。

どうしたら違う顔をあらわすだろうか  
同情でも引いてみようか。

「彼氏が死んだからとかならないの」

「へえ、それは大きいな」

既望が少し身を乗り出した。

葵が引けたのは同情ではなく興味だけだったらしい。

落胆というほどでもない落胆。苛立ちの形にならない苛立ち。  
かすかに波立った感情を、大きく息を吐いて落ち着ける。

（まあ、いい）

ただの取材。

結局は他人事。

既望がその態度をつらぬくなら、こちらもただ情報を提供すればいい。

どうせ切り捨てて置いていくだけの記憶だ。

最低限満足させて殺してもらえばいい。

過剰な同情よりよほどわずらわしくないだろう。

既望が感情をはさまないというのなら、こちらも感傷は交えない。

「まあ、実際は彼氏でも何でもないけど」

「付き合ってたわけではないのかい？」

「死んだときには」

そう。彼が死んだとき、葵はただの他人だった。

その少し前までは四六時中隣にいたとしても。

「彼も自殺？」

葵は首を横に振った。

「交通事故。左折してきた車にひかれたの」  
小さく苦笑する。

「もっとも、信号無視したのは車じゃなくてそいつのほうだって言うから、実際事故だったのかもわからないんだけど」

既望は頷いて、手帳にペンを走らせる。

「それはいつの話かな」

「前の春休みの終わり」

「三ヶ月前か」

既望は考え込むように体を引いた。

「ただの後追い、という感じではなさそうだね」

妙にきつぱりとした物言いに葵は眉をひそめて身構えた。

何をいうのだろう、この人は。

「彼が死んで、だけど縁はすでに切れていて、なおかつ事故からまだいぶ時間がたっている」

葵の顔をのぞきこむ。

「どうして今、死のうと思ったんだろう？」

彼が死んだから、だけでは理由にならないと。

後追いなどというステレオタイプの説明では納得できないと。

共感も同情も哀れみも用いずに、事実を追う口調で動機を探ってくる。

葵自身が気付きもしなかった感情の裏側。

唐突に、低く鈍く柱時計が鳴った。

針が三時を差している。

「じゃあ、これは宿題だな」

話を切り上げるように既望は言った。

このあと用事があるという。拍子抜けした葵の顔をのぞきこむ。

「もっとしゃべりたい？」

「まさか」

解放してくれるなら願ってもない、とあくまで突き放そうとする葵に笑う。

「それは残念。じゃあ、悪いけどあとはよろしく」

既望は薄い財布から千円札を抜き出してテーブルに置くと席を立った。

去りぎわ、顔だけをむけて付け加える。

「また明日も頼むよ」

## いつか見た空の色・2（前書き）

回想です。



## いつか見た空の色・2

そもそのきっかけはなんてことはない。  
高校に入ってクラスで席が近かっただけだ。

「後藤、空です。よろしく」

振り向いて自己紹介をした前の席の男の子に葵は目を睜った。  
綺麗な顔をした子だな、と思った。

地毛だという茶色い髪に、同じく色の薄い目。肌も白い。

整った顔立ちで一見冷たそうだが、笑うと形の違う二重まぶたに  
愛嬌があった。

綺麗な子だな、と思った。

華奢に見えるから好みは割れるだろうが、かなりモテるタイプだ  
ろう。

関わると面倒そうだな、と思った。

ただ出席番号が近かっただけ。接点はない。  
席が変われば自然に離れていくだろう。

とくに警戒はしなかった。

ところが。

「さーのさんっ」

やたらと明るい声に呼ばれてため息をつく。

振り向けば調子のいい笑顔で空が歩いてくる。

「これから帰り？」

「委員会」

「ありや残念」

そっけない返事に大げさな落胆の声が返ってきた。  
そのまま歩き出した葵の横にちゃっかりと並ぶ。

昇降口には遠回りだろうとじと目で隣をつかがえば、まんまと目が合ってしまった。

ここのところ万事こんな調子だ。

顔を見れば声をかけてくるし、ひとりと見ればやってくる。

同じ図書委員になった楠本敬司が空の友人だったというのがまたまずかった。

放課後、貸し出し当番のときにまで必ず顔をだしにくる。

二人にまきこまれる形で話し込み、司書の先生に注意されたこともある。

それはそれで楽しくなかったわけじゃないけれど。

正直、一緒にいると疑わしげな女子の視線を感じることが少なくなかった。

ただでさえ人付き合いは得意じゃない。今はまだ不自由もしていないが、この先避けられるようなことがあれば学校生活に支障をきたす。

できればあまり目立ちたくはない。

それに。

妙に積極的な様子はあるものの、どこまで本気なのかは疑わしい。普段からノリは軽いし照れも緊張もまったく感じられない。

葵にちよっかいを出しては反応を楽しんでいるだけじゃないのか。明るい笑顔でさえもときどき作り物めいてみえてどこか底知れない。

下駄箱へ降りる階段を通りすぎる。

どこまでついてくるつもりだろう。

「あのさ」

しびれを切らして口を開いた。

「ふざけてんならやめてくれる？ うつとつしいから」  
きょんとした顔でこっちを見る。

丸くなった目には驚きこそあれ動揺は見られない。  
やっぱり、と思う。

本気ではなかったのだろう。

「付き合う気もないくせに」

つぶやくように吐き捨てて、背を向けて歩き出す。  
と。

突然何かに腕をとられて足を止めた。

空が制服の上から手首をつかんでいる。

「何、」

にらみつけようと顔を上げ、息をのんだ。

初めて見る表情だった。

淡い色の目が夕陽に透けて妙に赤い。

いつもの笑みを含まない眼差しはいやに強く、まっすぐに葵をとらえる。

「付き合って、くれんの？」

いつになく硬い声。

捕まった、と葵は唇を噛んだ。

## 怠惰な火曜日・1

通学電車に揺られながら、葵は窓の外に視線を向けた。  
見慣れた景色が見慣れた通りに流れていく。

（もう、この電車にも乗るつもりはなかったんだけどな）

ツキカサキボウと名乗る男との奇妙な出会いから一夜。  
朝、目を覚まして真っ先に感じたのは落胆だった。  
生きているという事実。

つまりは昨日、失敗したということ。

絶望なんて言葉を使うほど強い感情はなかった。

（別に、死ぬなんていつでもできる）

既望に言った言葉に嘘はない。

ただ、すぐに二度目を起こせないならば、それまで目立つ行動は  
さけなくてはならない。

これ以上引き止められるようなことは御免だ。

だから、仕方がない。

自分に言い聞かせてもなお、学校に行くのは乗り気がしなかった。

死に損なって改めて登校するというのも馬鹿馬鹿しい。

……それに。

駅からそれで通学路の並木道にさしかかり、葵は息をつめた。  
校門が近づき生徒が増えるにつれそれは起こる。

葵がすれ違うと、ふっと周囲の声がやむのだ。  
通りすぎ、しばらくして後ろから密やかなざわめきが耳に届く。

（ねえ、あの子ってさ、）

（そうそう、事故で死んだあの、）

（え、あれが？）

（えー、なんか地味ー）

（でもあれって、フラれてたんでしょ？）

事故の後、数限りなく繰り返されたやりとり。

あいつが目立つ人間だったせいで、葵まで望まずして有名人だ。

しかも、目撃者がいなかったために車にひかれたという以外詳しいことは何もわからず、様々な憶測が飛び交っていた。

葵もまたそれらの声を否定する術を持たない。

何も知らないからだ。

教室のドアをあけるとまた一瞬、音が消える。

クラスメイトは今更噂をたてることもないが、それでも微妙な距離をとっていた。

要はハレモノ扱いだ。背中に少し視線を感じる。

昨日無断で休んだから、それもまた好奇の種になっているのかもしれない。

誰も声はかけない。葵も無言で窓際の席につく。

結局、あのまま既望は去ってしまった。明日も頼むよ、と言いな  
がら何の約束もない。

もちろん連絡先など教えていない。

（どうするつもりなのだろう）

もっとも、このまま会わずにすむのならその方が面倒がない。

そう思いながらも葵は妙に気にかかって、一日外を眺めていた。

それとも既望のほうはあの喫茶店で待ち合わせのつもりでいるのだろうか。

授業が終わって帰りの準備をしていると、廊下からやたらと陽気な声が響いた。

「あーおいつ」

無遠慮に高い声と呼ばれた名前に何人かが反応する。

「……杏香」

うめくように葵はつぶやいた。

幼馴染の今井杏香だ。6時限目は体育だったらしくまだジャージを着ている。

クラスメイトの間をぬうように葵の席までやってきた。

教室に入ってくるならあんな大声で呼ばなくてもいいのに。

「何？」

身構えながら聞き返す。

葵は杏香が苦手だった。

人懐っこく、世話好きで顔も広い。おまけに勘も鋭い。

タイプが全く違うのに、何故か昔から葵のことをよくかまった。

あいつが死んで、二年生になってクラスが分かれていい加減離れていくかと思ったが、いまだにちょっかいをかけていく。

確かに人見知りな葵はこれまで杏香に助けられたことも少くない。

だが、だからこそ今の葵にとっては煙たい人物だった。

杏香は悪戯っぽく笑って葵の耳元に口を寄せる。

「男の人が正門で葵のこと待ってたよ」

「男？」

葵は怪訝そうに首をかしげた。

「つばが広くて黒っぽい帽子に長いコートの若い人。そーさな、27、8くらいの」

（まさか）

顔が急に熱を持つ。それを見て杏香は見事に誤解した。

「やるじゃん。あたしけっこー好みかも」

「そついうのじゃない」

「そお？ カオ赤いですよ、葵さん？」

興味津々、と言わんばかりの杏香の目。

葵は鞆をつかんで席を立った。

「……もういい。じゃあね」

無理やり話を打ち切って、杏香の横を足早にすり抜ける。

このまま話していたらどこまで詮索されるかわかったものではない。

「あ、ちょっと葵、ホームルームはー？」

呼び止めたときにはもう駆け出すように教室を出ていた。

「あーあーいいねえ、モテる人は」

男友達はともかく彼氏のいない杏香は半ば本気でため息をついた。

## 怠情な火曜日・2

まだ生徒の姿のない鉄製の校門前に立つ人影に、葵はため息を吐いた。

のんきに手を振る男をにらみつける。

果たして希望はそこにいた。

「……何でここがわかったの」

昨日は学校には行っていないから後をつけられたわけではないだろう。

制服を着ていたのが失敗だったか。

紺ブレザーが多い学区のなかで、薄いグレーの制服はわかりやすかったのかもしれない。

あきらめ気味に葵はそう考えたが、既望からはずれた答えが返ってきた。

「昨日、君の靴についてた葉がケヤキだったからね。ここら辺でケヤキといったら風見街道の並木道だろう？ だからそこが通学路の学校はつてあたりをつけたのさ」

確かに風見街道は通学路だ。だが昨日は家からまっすぐあのビルに向かった。並木道は通っていない。

（なんでこんな、くだらない嘘）

「あなた、変」

「物書きなんてこんなもんだよ」

慣れたことのようにあっさりと既望は言った。

手に負えない、とばかりにため息をつく。

「どうでもいいけど、こんなところまで来ないでくれる」

既望は肩をすくめた。

「仕事だからなあ」

「これも取材だっていうの」

「そうだね、高校という場所を見てみたくて。なんか理由でもなき



や来られないだろう」

まぶしそうに校舎を仰ぎ見る。

「おもしろい場所だな。独特の空気がある。なんだか楽しそうだし、外からするとそんな風に見えるものなのだろうか。

既望の視線を追うように降り返る。

ホームルームを終えた生徒たちの姿がちらほらと見え始めた。

既望が葵の肩を軽く押した。

「行こうか。昨日の店でいいかい？」

歩き出した葵が鞆をゆすって肩にかけた。

ちやり、と小さな金属音が鳴る。

「それ、君の？」

鞆の持ち手につけられた銀色の鎖に目をとめて既望は言った。

「その鞆の」

持ち手につけるには鎖が長すぎるようで、何重にも巻きつけてあった。もとはネックレスだろうか。銀の十字架が吊り下げられている。

シンプルな形だが、女の子がつけるにはやや大ぶりに見えた。

「傷だらけだね」

そう。何より目を引くのがその傷だった。

おそらく滑らかだったであろう表面に強く擦ったような無数の傷が走っている。端が黒ずんで汚れもあるようだ。

「……形見」

ぼつり、とつぶやくように葵は言った。

「もとはこっちがあげたものだけど」

「事故の時もつけてたのか」

既望の指摘に葵は足を止めた。

「知らない」

目を伏せて言う。

傷ついた銀の十字架。

春休みがあけた始業式の日、前の担任に呼び出されて渡された。空の保護者という人が葵にこれを渡すよう頼んだのだという。

（事故にあったときにつけていたものだそうだよ）

担任が保護者から聞いたなら、おそらくそれは事実なのだろう。それでも葵にとって事実という実感はない。ただの伝聞でしかなかった。

葵に別れを告げ、突き放しておきながら何故ずっと手放さなかったのか。

どうして事故の時にまで身につけていたのか。

保護者が葵に渡すように言った訳は。

それは、空の意思だったのか。

何も知らない。何も見ていない。何もわからない。

答えが出ない問いを追い続けるのは消耗する。

だからもう終わらせようと決めたのに。

終わらせる過程でまた思い起こされる。

なんて、不毛。

「佐野さんは、彼のことが好きだった？」

葵の鬱屈などお構いなしに既望は質問を続けてくる。遠慮も何もない。はしない。

それでもむきになって反発するのは子供じみてる気がして、葵はつま先に視線を落とした。

「嫌われてたけどね」

遠まわしに認めたことでまたからかわれるかと身構えたが、既望は予想に反して顔をしかめた。

「嫌われてた？ どうして」

単純な驚きではない口ぶりは少し意外だった。

動機として「彼氏が死んだから」と言った時よりも反応が大きい。事故の前には別れていたのだから別に不思議はないだろうに。作家先生は純愛モノがお好きか。

「さあ。別れてからずっと避けられてたから。メールも電話も無視だった」

「……事故は春休みだったね。別れたのはいつごろ？」  
「一月の終わり」

既望は返事のかわりにため息をついた。

どうやら昨日引こうとして失敗した同情を今更のように引き出してしまったようだ。

なんとなくおかしくなって葵は小さく笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5610z/>

---

空への道行き

2011年12月27日20時46分発行